

副助詞研究の軌跡と課題

宮 地 朝 子

本稿は、副助詞研究のこれまでの蓄積について概観し、副助詞の持つ多機能性に注目しながら、現状と展望について述べるものである¹⁾。

副助詞は「副」の名称のとおり連用修飾句の構成を中心としながら、格助詞や係助詞、接尾語などと重なりつつ異なる多様な様相を示す。また副助詞に分類されてきた個々の形式がそれぞれに幅広い用法を持つ。さらには、個々の形式それぞれに歴史的展開があり、隣接関連する範疇の諸形式もこれに参与する。自ずと、「副助詞」の名称のもとでの研究は、形式についても、その規定についても、立場によって対象や範囲が一致せず、多様な様相を呈している。

このような多様な立場が林立する背景には、個々の形式の幅広い語性のみならず、根拠となる現象面、観察対象（形式）の中心の所在の異なりも大きく関与している。またカテゴリ設定の主要な根拠をどこに置くか（意味機能か、統語的振る舞いか）、形式とその所属カテゴリの関係はどう見るか（多機能を認めてカテゴリを設定していくか、機能ごとに異なるカテゴリを立て、同音異義語的位置づけを許すか）といった根本問題も、立場の異なりに影響している。その複雑な様相を解きほぐし研究史を概観するならば、本来、多様な立場の各々について、全体像を俯瞰し、個々の形式の位置づけの検討を積み重ねた整理が必要であろう。しかし、研究対象や研究目的、方法や理論的基盤を異にするさまざまな立場を超えての見極めは至難の業である。筆者の関心は、史的变化を含めた日本語の副助詞類の動態および多機能多用法の説明にあり、本稿の概観も、筆者の関心にひきつけた範囲と見方に傾かざるを得ない。

ただし、副助詞という名称のもとに観察されてきた対象は、歴史を超えて多機能多用法の形式を多く含む。動態と多様性の説明に適するものとして本論で紹介する枠組みは、現代日本語の様相の説明に対しても、一定の合理性をもつものであると考えたい。

以下、1節で山田孝雄に始まる副助詞の規定を確認し、2節で主に現代語研究で展開した「副助詞」の範囲の変化（拡張、移行）とそれに付随する範疇性のとらえ直しを概観する。3節で本稿の内容をまとめ、展望を述べる。

1. 副助詞とは

1.1 山田孝雄の規定

副助詞というカテゴリとその名称は、山田孝雄（1908）によって設定された。自ら「確

(1)

に著者の創見の一なりと信ず」(1908: 576) というその定義(1)と所属語(2)をみてみよう²⁾。引用は適宜、定義論述が端的に整理された山田(1936)を参照する。

- (1) a 副助詞は或る用言の意義に關係を有する語に附属して遙かに下なる用言の意義を修飾するものなり。(山田 1936: 439)
- b 句の構成分子にはいづれにも通じて附属しうべきものにして、しかもその下に来る述格にたつ用言の意義に対して副詞の如き性質をあらはして修飾限定するものなり。(山田 1936: 403)
- (2) a 文語：だに、すら、さえ、まで、のみ、ばかり、まで、など
- b 口語：ばかり、まで、など、やら、か、だけ、ぐらゐ

副助詞相当の語については、中世以来の伝統的なてにをは研究においても、「姉小路式」に連なる連歌論書群の「たましゐをいれべきてには」(小柳 2013)、富士谷成章『あゆひ抄』(1778 安永7年刊)における「能美家」「^の陶爾家」などに先駆的な把握が知られる(小柳 2010)。また、山田(1908)に先行する近代日本文典、大槻文彦『広日本文典』『広日本文典別記』(1897)の「第二類の互爾乎波」では、第一類(格助詞相当語)と区別して「上ニ各種ノ語ヲ承ケテ、其ノ意ヲ、下ナル動詞、形容詞、助動詞ニ通ズ」(180-181)「洋語ニテ言ヘバ、副詞ニ似タルモアリ」(別記137)とされ、(1)の規定にも並行的である。岡澤鉦次郎『初等日本文典』(1900)の「副用静辞」という名称は「副助詞」という名付けの着想となった可能性も高い。しかし、大槻の「第二類の互爾乎波」は(2a)に「は・も・ぞ・なむ・こそ・や・か・な(禁止)」を一括して副助詞と係助詞とを「混同」し、岡澤の副用静辞にはさらに「と・の・が・し」(な(禁止)を除く)が一括されて、山田の副助詞とは「さすところと内容において大差」があるという(1908: 588)。

山田(1908)が格助詞・係助詞と副助詞を区別する基盤的根拠として注目したのは、その相互承接関係における「一定の規律」(1936: 446) (3)-(6)である。「この格助詞と副助詞係助詞との関係の縦横的なこと」の指摘は「実に吾人の創案」(1908: 626)であるという。山田(1922, 1936)は口語においても(3)-(6)に並行的な現象面を認め、副助詞・係助詞の別を適用して「実に全然著者の創意」とする(1936: 474)。

- (3) 格助詞 (山田 1936: 446-447)
- a 格助詞は、決して相互に重ね用いられることがない。
- (4) 副助詞 (山田 1936: 446-447, 483)
- a 副助詞はすべての格において格助詞の代理ができる。
- b 格助詞と副助詞は、相互に承接する。格-副/副-格 いずれも可。
ア・ただいたゞきばかり副を格削ぎ(源氏物語・浮舟)
イ・人の心を格のみ副動かし(源氏物語・桐壺)
- c 副助詞は相互に承接する。

ウ・参らむ程まで副だに副ひなびにいらへ聞えし（和泉式部日記）

エ・影ばかり副のみ副人の見ゆらむ（古今和歌集）

d 副助詞と係助詞は相互に承接し、必ず係助詞が後行する。

オ・夜中まで副なむ係おはせし（枕草子）

カ・御なのりさへ副ぞ係あげにめでたき。（源氏物語・賢木）

(5) 係助詞（山田 1936: 483）

文語：は・も・ぞ・なむ・こそ・や・か・な（禁止）

口語：は・も・こそ・さへ・でも・ほか³⁾・しか

a 係助詞はすべての格において格助詞の代理ができる。

b 係助詞と格助詞は相互に承接し、必ず係助詞が後行する。

c 係助詞は相互に重ね用いられる。ただし一定の慣例がある。

d 係助詞と副助詞は相互に承接し、必ず係助詞が後行する。（=(4)d）

1.2 副助詞の2層性

この山田（1908, 1922, 1936）による区分は、助詞相互の承接順を中心とした現象面の縦横の関係、すなわち統辞・範列な対立関係に基づく点で、客観的といえる。しかしここには、まだ精緻化の余地があった。中古語において、格助詞と副助詞の承接、副助詞相互の承接の様相を精査すると、格助詞・他の副助詞に対して、必ず先行する類「ばかり・まで」と、必ず後行する類「のみ・さへ・だに」の大きく2類にわけられる（副助詞の2層性（近藤 1995、小柳 1999, 2007, 2008)）。小柳（1999）に倣い、前者を第1種副助詞、後者を第2種副助詞と呼ぼう。

この2種の区分には、連動して観察される統語的分布の対立が複数挙げられる。例えば、第1種だけが断定の「なり」を伴う述語用法(6)と「～の」の形での連体用法(7)を持ち、第2種においてのみ形容詞連用形への接続(8)が可能などである。

(6) 御官冠仕うまつりて、死ぬばかり第1種なり。（竹取物語）

(7) 身にあまるまで第1種の御心ざし（源氏物語・桐壺）

(8) あたり近くだに第2種寄せず（源氏物語・乙女）

山田（1908: 599–602）でも、「のみ・ばかり・まで・など」に「特種の用法」として述語用法や「の」による連体用法が、また、「のみ」をのぞく3助詞に終止形接続や程度用法があることが記述されている。しかし山田が第1種・第2種の整理に到らなかったのには、2層にまたがる「など」の存在と併せ、「文語」内の位相差や通時の変化を考慮せず、上代から近代普通文までを観察対象としていることが影響しているだろう⁴⁾。

上にみた承接関係や統語的振る舞いから帰納すると、ともに連用成分の構成に関与する第1種・第2種副助詞の有り様は(9)のように整理できる（小柳 2008: 10）。第1種副助詞は連

用成分内で前接語のみを対象範囲・焦点とする一方、第2種副助詞は、連用成分（句以上の要素）に外接し、述語を含む句（clause）全体にかかわる。

(9) 前接語 + 第1種副助詞(+格助詞) 連用成分 + 第2種副助詞

さらに近藤（2007）では、テ形への接続の可否も、この2層および係助詞の区分に連動していることが確かめられた。第1種副助詞はテ形節に後接しない。第2種副助詞は(10)のように、従属度の高い、付帯状況を表すようなテ節に接続するが、(11)の線部のように、主節と異なる主語や評価の副詞なども生起する、従属度の低い、継起や原因理由を表すようなテ節には後接しない。一方、この環境には、係助詞は後接可能である(11ab)。近藤（2007）は、現代語で行われた、文中の要素の分布と包含関係に基づく従属節の階層構造的整理（南1974、1992、田窪2010、益岡2013）を援用したものであり、第1種、第2種副助詞と係助詞の機能を、意味・統語的な階層構造上にどう位置づけるかにおいて示唆的である（(10-11）：近藤2007より）。

- (10) a 臥してのみ_{第2種}おはするを（源氏物語・宿木）
 b めづらしきさまにてさへ_{第2種}あなるをおぼすに（源氏・漣標）
- (11) a 夜いたうふけてなむ_係、ことはてける（源氏・花宴）
 b まことに明け方になりてぞ_係、宮帰りたまふ。（源氏・梅枝）

このほかにもこの2層および係助詞の層に対応する現象面が見出される余地があるだろう。ここまでの整理を表1に示す。中古語においては「など」をのぞき、機能的に対立する2層と、助詞の所属・分類としての第1種・第2種が矛盾なく対応する点に注目しよう。

表1 古代語副助詞の統語的振る舞い（小柳2007:9表1に加筆）

区分形式 統語的特徴	第1種副助詞		—	第2種副助詞			(参考) 係助詞
	ばかり	まで	など	のみ	さへ	だに	は・も/ ぞ・なむ・や・か
格助詞との承接	前置	×	前置・後置	後置	後置	後置	後置
連用成分に後接	×	×	○	○	○	○	○
副助詞同士の承接	前置	前置	前置・後置	後置	後置	後置	後置
「～の」連体用法の可否	○	○	○	×	×	×	×
述語用法の可否	○	○	○	×	×	×	×
形容詞連用形への接続	×	×	○	○	○	○	○
A類テ節への接続	×	×	○	○	○	○	○
B類テ節への後続	×	×	×	×	×	×	○
係り結び	×	×	×	×	×	×	?/○

1.3 副助詞の本質規定——副詞性の助詞

山田（1908）は副助詞の機能について、上述の（4）のように説明し、副詞、なかでも「属性副詞（引用注：程度副詞・情態副詞の上位分類）に似たるもの」（1908: 577）として、副助詞の機能を副詞になぞらえた。例えば「ばかり・まで・など」は（12）のように、程度副詞句相当の連用句を構成するという（1908: 601）⁵⁾。

- (12) a 花と見るまで雪ぞ降りける。
 b 法師ばかり羨ましからぬものはあらし
 c 貴き賤しきなどさまさまにて

副詞との性質の類似に着目したこのような山田（1908）の副助詞規定は、意味的側面やその範疇性の考察や本質規定においても継承されている。

例えば、副助詞の副詞句を構成するという機能に注目して、山田が「形式副詞」と呼んだ「まま」などの接尾語類と一括し、「形式副詞」というカテゴリーを拡張的に採用する立場（内田 1975、奥津 1986等）も、「副詞性の助詞」という見方の一つの継承といえるだろう⁶⁾。

一方、小柳（2008）では、同じく「副詞性の助詞」という見方を評価継承しつつ、副助詞の意味機能と情態副詞のそれとは異なるとし、程度副詞・陳述副詞の類に「真に副詞らしい副詞の特徴」を認めて副助詞を体系的に整理する。この見方は、森重（1959）、川端（1983）等の副詞論を援用し、その意味的な本質を「(数)量性」に見ることで導かれる。

第1種「ばかり」の概数量（13）、限定（5bア）、「まで」の極限（5cウ）といった意味用法が数量性にかかわることは理解しやすく、また時空間表現（その広がりや量的に把握できる）（14ab）や、事態の様態を示す指示副詞を受けるといった現象面（15）とも整合的である。

- (13) 宿居にさぶらふ人、十人ばかりして、参り給ふ。（源氏物語・東屋）
 (14) a 明後日ばかり車奉らん。（源氏物語・東屋）
 b 桂川のもとまで物見車隙なし（源氏物語・行幸）
 (15) a さばかり烈しかりつる波風に、（源氏物語・明石）
 b かうまでことことしうもてなし思さじ（源氏物語・若菜下）

では事態句を前接要素とする場合の第1種、連用句を承け事態を専ら対象とする第2種はどのように量にかかわるのだろうか。小柳（2008）では、程度副詞が表すのは、「事態の存在の様相」であって、例えば「顔はいと赤くすりなして立てり（顔はこすってたいそう赤くして立っている）」のように、事態の有する「度合いの高さ」といった量であるという。また陳述副詞が表すのは、「事態の成立の様相」であり、「必ずよからぬ事、出で来なむ（きつとよくないことが起こるだろう）」のように、「事態が成立する確率の高さ」といった量的把握であるとす。

ここに、副詞性は、「事態の様相（存在または成立）に関わる量を示す」ものと把握し直される。副助詞の意味機能の分化も、当該の副助詞の対象が事物か数量か事態かという軸と、単

表2 中古の副助詞の体系 (小柳2008 表4に加筆)

種別	第1種			第2種		2つに またがる	
	上接語句	事物	数量	事態	事態		
数量性					存在性	成立性	
単数的	限定	概数量	程度	唯一性	/	/	/
	ばかり			のみ			
複数的	極限	延長・持続	極度	累加	高確率/ 低確率	例示	
	まで			さへ	だに	など	

数・複数という数の根本、さらに事態の存在・成立の様相性によって体系的に対立する語群と位置づけられ、その範疇性は「数量性」において規定されることとなる。

上接語にのみ関わる第1種副助詞は、その量性の把握において、直前部を対象範囲とし、それが集合の要素を表す。直前部の要素には、事物・数量・事態があり、何を取るかで用法が分化する。一方、第2種副助詞は句を対象範囲とし、文脈によって、句の表す当該要素を含む集合を構成する。量性把握の対象は事態であって、「真に副詞らしい副詞」としての事態の様相性に関わるのは第2種副助詞ということになり、第2種副助詞が「真に副詞らしい副助詞」と位置づけられる(表2)。

「副助詞の量性」に注目した副助詞研究では、量性に関わる点で、副助詞がその意味機能において「自者と他者」といった対立項を要し、その規定において「集合」「対象範囲」「焦点」⁷⁾といった要素を要することにも自ずから根拠を与える。これは現代語文法論で基盤的位置を占める「とりたて」の規定(2.1節)に説明を与えるものともなる(小柳2008)。

副詞性の助詞という観点からの副助詞研究は、副詞研究の進捗によってさらなる進展が期待できる。一方、副助詞の現象面という言語現象から副詞性・副詞らしさを根本から問う点で、抽象的な思弁にも陥りにくいだろう。副助詞研究が副詞研究に寄与する方向性も大である。

2. 副助詞の範疇的特性、本質の再検討

上に見たように、副助詞という範疇は、相互承接などの至極客観的な現象面、統語的振る舞いに基づいて設定された“文法的な”区分である。特に古代語研究においては、山田の区分がさらに精緻化され、「雑多な助詞の寄せ集め」とも見られてきた副助詞の、体系性と範疇性の追究が進展している。

しかし一方、早くも、松尾(1936)、時枝(1954)などの近代最初期の口語文法においては、副助詞と係助詞の区分を不要とする見方が提示され、副助詞の範囲と規定が見直されることとなる。背景として、まず、現代日本語では、係結び現象が観察されないことが挙げられるだろ

う。山田（1908）はその助詞規定において、副助詞は用言の「意義」に、係助詞は用言の「陳述」にそれぞれ関与するとした。「陳述への関与」の端的な現象面での証左が、述語の形態変化を伴う係結びの現象である。定義の上で主要不可分とされた現象と切り離されれば、いかなるカテゴリーも設定の根拠を失う。また、そもそも、山田文法の観察はその基盤が文語にあり、(4)a-dのほかに山田（1908）が係助詞の特性として指摘する「接続助詞バの下に付く」「文末にも用いられる」といった点が現代語では観察されないことも、係助詞・副助詞の区分の継承を躊躇させる。副助詞の「句の構成分子にはいづれにも通じて附属する」という記述もその範囲の拡大を促し、構文的振る舞いの差違を看過させる一因となっただろう。「陳述」の内実の把握に論争も生じるなかで（尾上1990）、現代語文法論では、係助詞・副助詞の区分の設定が説得力を失っていく。近代の口語、現代日本語を対象とした観察に立脚する立場において、区分の蓋然性は大きくない。ここに係助詞・副助詞を一括する見方が提示されることとなる。

橋本文法（例えば橋本1933-34）では「係助詞」「副助詞」が名称とともに継承されたが、同時に、第1種副助詞相当の形式が接尾語類とともに「準体助詞」とされた。係助詞・副助詞の区分の要件は、ますます係結びの有無のみに収斂する。橋本文法も係助詞・副助詞を一括する立場を大きく支えた。これを受け、松尾（1936: 420）では副助詞・係助詞の別が不要とされ、時枝（1954）では「限定を表す助詞」として一括された。以来「は、も、こそ、さえ、でも、しか、まで、ばかり、だけ、ほど、ぐらい、など、きり、なり、やら、か」といった形式を現代語の副助詞とする見方が一般となり、国語科教育でも一般的な立場となっている⁸⁾。

副助詞設定の根拠、副助詞という区分の範疇性は、係助詞・副助詞区分の統語的振る舞いの異なりよりも、強調対比、広義の限定といった“添意”ともされる意味機能によって特徴付けられることとなった。この趨勢が、副助詞の範疇性の、新たな視点からのとらえ直しに向かう。その一つで現代日本語を中心に広く採用されているのが「とりたて」という範疇である。

2.1 「とりたて（助）詞」

2.1.1 とりたて詞の規定と成果

現代語「とりたて」研究の基盤的位置を占める立場として、沼田（1986）に始まる一連の研究（沼田2000, 2003, 2008, 2009）の規定を見てみよう。「従来の副助詞・係助詞」について、「とりたて詞」と「形式副詞、形式名詞、順序助詞等に再分類し、とりたて詞についてこれに属する語群の体系化を試み」たものである（沼田2009）。以下の語群(16)を「とりたて詞」とし、その意味機能を(17)のように規定して「一種の命題の複合化」（沼田2009: 249）を示す不変化詞の範疇と位置づける⁹⁾。

(16) も、でも、すら、さえ、まで、だって、だけ、のみ、ばかり、しか、こそ、など、なんか、なんて、なんぞ、くらい（ぐらい）、は

(17) とりたて詞は、文中の種々な要素を「自者」とし、自者と範列的に対立する他の要素を「他者」とする。そして、自者について明示される文である「主張」と、他者について暗示される文である「含み」を同時に示し、両者の論理的関係を表す。論理的関係は、「断定」と「想定」、「肯定」と「否定」のような対立する概念である。(沼田 2000: 215)

「とりたて詞」と現代語の「副助詞」は、研究者によって多少の出入りはあるものの、所属形式、その名で指される語彙項目が、ほぼ重なっている。ゆえに、「副助詞」と「とりたて(助)詞」という名称は、概略同じ意味機能を持つ語群を指す術語として、古代語研究なら「副助詞」、現代語研究なら「とりたて(助)詞」と使い分けられている傾向も認められる。しかし、「とりたて詞」の規定(17)は、山田の副助詞の規定とは立脚点も違い、一見して大きく異なることがわかる。

「とりたて詞」の立場では、当該要素が(18a-c)のように、文中の任意の要素を幅広く受け、格助詞の有無や前後にかかわらず(分布の自由性)、範列的關係を前提とした限定対比的な意味を表すことを重視する。

- (18) a 果物 {まで・までを・をまで} 食べた。
 b 果物を食べた {だけ・ばかり・まで} だ。
 c 果物を食べ {さえ・こそ・など…} した。

また、とりたて詞は、直前の上接語を焦点とする直前焦点だけでなく、述語を承けて述語句内の名詞句を焦点とする前方焦点(19a)も、名詞句を承けてそれを含む述語句全体を焦点とする後方焦点(19b)もとらう。古代語では、第1種副助詞が直前焦点のみにかかわるが、第2種副助詞が、とりたて詞同様、焦点と対象範囲の不一致を示す(小柳 2008)。

- (19) a 昨日、花子は課題図書を読まずに、〈漫画〉を読んでばかりいた。
 =漫画ばかり読んでいた。

- b まだ未成年の太郎は〈酒を飲んだ〉ばかりか〈タバコさえ吸った〉。
 =タバコを吸いさえした。

さらに、とりたて詞は、文構成に直接関与しない「任意」の要素であって、文中から削除しても文意が損なわれない(20a)(任意性)。また、提題の「は」等とは異なり、連体文内(20b)に出現する一方(連体文内性)、連体文主名詞位置(20c)や述語位置(なかでもガ分裂文焦点位置)(20d)に立たないなど名詞性を欠く(非名詞性)。以上4点の統語論的特徴「分布の自由性」「連体文内性」「非名詞性」「任意性」をすべて備えるものが「とりたて詞」とされる。

- (20) a 太郎 {にだけ・に \emptyset } 会った。
 b 老人さえ参加したマラソン大会 (cf. ×鳥は飛ぶとき)
 c?? マラソン大会に参加した老人さえ
 d* 太郎が話したのが、自分のこと {だけ・ばかり・さえ・も} だ。

同一形式であっても、提題の「は」は連体文内性を持たず、着点・期限を表す「まで」（格助詞）、数量や程度を表す「だけ」「ばかり」（形式名詞・形式副詞）などは、名詞の直後や格助詞の前にのみ出現するという制約をもつ点で除かれる。「とりたて詞」という区分は、範疇性を追究し、同音異義形式を積極的に容認して助詞の分類としての性格を担保している。

「連体文内性」は提題用法の係助詞、終助詞・接続助詞類との相違を示し、「非名詞性」「任意性」は体言に近い振る舞いをする接尾語や形式名詞類との相違を示す振る舞いと位置づけられる。これを適用すると、「とりたて詞」は、より正確には、第2種副助詞と、提題用法を除く係助詞相当の機能語が取り出されたものといえ、とりたて研究は、これらに共通の意味機能の追究とも位置づけられる。

現代日本語研究においては、従来の副助詞研究において、強調、対比、限定などと把握されてきた“添意”の様々を、「文中のある要素に対する系列（範列）的な関係づけの付与」（仁田1997）、「同類の他の事項を背景にして、ある事項を取り上げる働き」（益岡・田窪1992）等として「同類範列関係」（丹羽2007）において把握する整理が基盤的位置づけを得ている。これこそ、沼田（1986）以来の「とりたて詞」研究の提示に始まるものである。意味機能「とりたて」が抽出され、「集合」「自者・他者」「主張・含み」「焦点」「作用域」「スコープ」といった道具立てによって体系的な整理を可能にする枠組みが設定された。これにより、(16)の形式群個々の記述や対立的使い分けに関する考察が大きく蓄積を得ている。意味機能としての「とりたて」は副詞研究にも援用され（工藤2000、安部2006等参照）、特に現代日本語の助詞・機能語研究を大きく進展させている。「とりたて詞」研究の眼目は、「とりたて」という機能を担う機能語群の設定にあり、画期的である。ただ、「とりたて」研究においても、同音異義形式の取捨や、どの形式のどのような側面を典型と見るかにおいては多様な立場があり、本質や範疇性についての見解は必ずしも一致しているわけではない。

2.1.2 「とりたて」の典型のありかと範疇性

まず、典型のありかについて見る。何を典型と見るかは、とりたて詞の範疇性の追究や本質のありかの意味づけも方向付ける。

現代語において、ダケやバカリの幅広い分布はとりたて詞の「分布の自由性」を体現する典型とも目されるが、沼田（2008, 2009）では、ダケやバカリの分布の「制限のなさ」を、歴史的用法を残す「周辺的な分布」とみる。一方、とりたて詞の「典型的な分布」は、「格助詞に後接し、述語には連用形に後接し、その後に「する」「ある」等の形式述語があらわれる」という、モノなど従来係助詞とされた形式の示すものと整理された。これを踏まえ、沼田（2008, 2009）では、とりたて詞の「作用域の先端か末端かを標示し、作用域となる述語句のくくり出しを行」う機能が、係助詞の係り結びと関係する可能性にも言及される。

このような見方は、「取り立て助詞」を創案した宮田（1948）をはじめ、寺村（1991）、青

木(1992)、半藤(2003)などのように、「取り立て」を「係助詞」の機能として規定する立場とも深く関わることになる。しかし、そこでは「取り立て」が「は・も」をはじめ、提題と対比・累加的意味を併せ持つ係助詞の機能を矛盾なく説明する概念として採用されている。提題と対比を併せ持つ語群としての係助詞類と、提題用法の場合をのぞいて係助詞と第2種副助詞との重なりに関与する語群を取り出すとりたて詞とは、自ずから、同然ではないだろう。「とりたて」が「係助詞」「副助詞」とどのように重なりあうのか、係助詞・副助詞のどのような重なりを抽出し見出す範疇なのかについては、追究の余地と多くの課題が残されている。

2.1.3 統語論的特徴の再検討

次に、統語論的特徴の再検討について見てみよう。

上で見た4つの統語論的特徴は、「とりたて詞」の外延を定め、範疇性を把握するうえで欠かせない基準といえる。しかし、そのすべてを満たすという条件で、とりたて詞が排他的に抽出されるわけではないとの指摘もある(丹羽1992, 2006、宮地2007等)。例えば、次のような「だけ」は限定解釈を持ち「とりたて詞」の規定に矛盾がないが、削除不可であって任意性については満たしていない(丹羽2006)。

(21) 形 {○だけ/×φ} 唇をつけて飲むふりをする。

同様に、「とりたて詞」というカテゴリーを認める立場からも、その内部が均質ではないとして、統語論的特徴の再検討が行われ「区分」や「分類」の可能性が提案されている。

例えば、とりたて詞においては、先の(20c, d)がいずれも非文法的となることから、「非名詞性」が指摘されてきたが、茂木(2001, 2008)では、とりたて詞内部の「(非)名詞性」にも差違があるという。(22)名詞述語文や(23)「XのY」名詞句内での分布制限、(24-26)数量詞との共起の様相などを観察し「だけ」「ばかり」タイプのとりたて詞にはある種の名詞性が認められ、「構文的に文の述部から切り離された(典型的な述部要素との呼応が直接的に成立しない)位置に分布することが許される」ことを指摘する。

(22) a 合格者は有名校出身者 {だけ・ばかり} だ

b *合格者は有名校出身者 {まで・さえ・も} だ

(23) 「XのY」型名詞句における分布

	ダケ	バカリ	マデ	サエ	
a 動名詞	○	○	○	×	(例: 新人__の参加)
b 存在	○	○	×	×	(例: お酒__の冷蔵庫)
c 所有	○	×	×	×	(例: 私__の車)

(24) 数量詞との共起(シカ焦点句内)

a [特に好きなケーキ {だけ・ばかり} (を) 3個] しか買わなかった。

b * [特に好きなケーキ {も} 3個] しか買わなかった。

(25) 数量詞との共起（等位接続構造）

a [ビールばかり（を）3本]と[おでん]を注文した。

b * [ビールも（を）3本]と[おでん]を注文した。

(26) 数量詞との共起（ハ分裂文焦点位置）

a 注文したのは、[ビールばかり3本]だ。

b * 注文したのは、[ビールも3本]だ。

茂木（2008）では、さらに、典型的な量化詞とされる wh 句ととりたて詞が共起する際、「さえ・も・しか」タイプのみ制限を持つという先行論の指摘から、同じく量化詞とされるとりたて詞の中に、「量化詞としての性質の異なる少なくとも2つのタイプのものが含まれる」とする。上山（2008）では、格助詞に前接するダケと後接するダケをわけ、後者のみを量化詞とする分析を示しており注目できる。後者は、格助詞に後接する点で「さえ・しか・も」タイプに類すると考えて矛盾はない。

ここで抽出されたとりたて詞の「だけ・ばかり」類、「も・さえ・しか」類という区分は、承接関係に基づく係助詞・副助詞の区分に矛盾しない。「分布の自由性」という特徴に留保を与え、「(非)名詞性」という特徴の再検討・精緻化からとりたて詞の下位分類に向かう観察である。茂木（2008）では、非名詞性のほか、連体文内性についても検討が加えられ、「連体修飾節内に分布可能な述部要素と呼応するという」とりたて詞の性質を捉えたものと位置づけられる。ここで見た、4つの統語論的特徴が「とりたて詞」のどのような性質の反映なのかについての（「統語論的特徴」であるのか否かも含めた）再検討・精緻化は、茂木（2001, 2008）が指摘するように、カテゴリーの妥当性を否とする論拠となるというよりも、むしろ、その範疇性や本質を追究する営みに直結する。とりたて詞には、(22-26)のような違いをこえて共通の分布があり、「フォーカスの拡張のような、表面的な分布と意味解釈のズレが起こる（形式と意味をつなぐ何らかの不可視的なメカニズムが関与する）」といった特徴によって機能語群として範疇をなす。その本質の把握や解明のための下位分類、基準の精緻化は、たしかに日本語文法論にとって重要な課題となる。

ほかにも、とりたてにかかわる形式の分類については、述語との共起関係からの階層性に基づく分類（野田 1995等）や、生成文法等の統語理論に基づく整理（青柳 2006, 2008等）など、様々な試みが行われている。「とりたて」というカテゴリーの体系的把握には、厳密な外延規定によって「とりたて詞」を抽出し、これに該当しない同音意義の語彙項目を複数たてる方法がある一方で、個々の形式の同一性を前提に、多機能性や用法分化に注目した記述分析も可能である¹⁰⁾。例えば、「とりたて助詞は基本的に単純な意味しか持たず、文末の言語形式や談話構造によって、多義的になる」とする立場からのまとまった論考も提出されている（澤田 2007等）。

「とりたて（詞）」は、その範疇性の追究が、そのような多様な立場からの把握分類と、これ

まで気付かれなかった新たな現象面の発掘や意味づけという営みを通じて行われる限り、単なる語の分類とその是非論で価値を損なうことなく、立場の違いを超えた生産的な議論を導いて、現代語の機能語研究を進展させていく基盤でありつづけるだろう。

2.2 「副助詞」の継承・再検討

2.2.1 多機能語としての位置づけ

一方、現代語においても「副助詞」という名称を維持し、範疇性について新たな見方を提示する立場がある¹¹⁾。ここでは、「とりたて」が、副助詞および係助詞相当の形式の担う機能の一つと位置づけられている。

宮地 (1952) では、(27a) のように、①「上に体言又は連体形態を置き」「全体で体言的語句を構成する末尾の要素として働き」格助詞に前接する機能を準体機能、(27b) のように②「上に連用語を置き、これにさらに何らかの意味を添える働きをする」機能を副機能と名付ける。橋本文法では、①が準体助詞、②が副助詞の機能とされたが、(27ab) では、上接語句が名詞か、連用成分 (格助詞句か) にかかわらず「あなたを頼りにしている」といった事態を対象範囲とする解釈が可能である。宮地 (1952) では、副助詞は①②を分かちがたく併せ持つとする。

(27) a あなただけを頼りにしているんですよ。(準体機能)

b あなたをだけ頼りにしているんですよ。(副機能)

ここで副助詞は、準体機能・副機能という二面性を持つ機能語として位置づけられている。一方、①は第1種副助詞の、②は第2種副助詞の、文中での出現位置と機能に相当する。古代語では例外的な位置づけであった「など」のように2層にまたがる形式の有り様が、現代語では副助詞の典型ということになる。

現代語でも (28, 29) のように、名詞へ直接接続するか格助詞句などの連用成分へ下接するかによって意味機能の差が比較的明確に看取できる場合がある。

(28) a この薬だけで治る (「この薬」のとりたて)

b この薬でだけ治る (「この薬で治る」のとりたて)

(29) a 3時ぐらいにおやつを食べよう (「3時」のとりたて〈程度〉)

b 3時にぐらいおやつを食べよう (「3時におやつを食べる」のとりたて〈最低限〉)

「とりたて詞」の立場でも (28, 29) のような対立の傾向を認める一方、格助詞の前後接にかかわる現象面や可否判断には揺れが大きいことなどから、むしろ (27) の様相に注目し、分布の自由性を重視した。助詞の相互承接、特に格助詞への後接の可否に意味や機能の差を認めるか否かが、第1種・第2種あるいは副助詞・係助詞相当の区分を認めるか否かという立場の異なりを産む大きな分水嶺となっている。その差違は、古代語と現代語の異なりの反映でもあって、目的と対象によって重心が変わると考えることもできる。

近藤 (1983) は、宮地 (1952) の、準体機能・副機能を併せ持つ二面性を副助詞の範疇性

き込んだ文法変化の考察にも適用しやすい。歴史・地理的に多様な様相を示す形式の記述の精密化にも直結し、副助詞類の史的展開やその類型的把握にも適しているだろう。

この形態的同一性が優先された整理においては、程度、限定、例示、あるいは原因理由や慣用用法とされてきた多様な意味用法が、包括的に扱われると同時に、形態統語的振る舞いとは独立に把握できる。とりたて詞「ぐらい」の例示(35a)や最低限(35b)の意味用法に、(35c)程度の「ぐらい」と共通の「程度性」が含まれるといった、「とりたて」と「程度」の意味上の連続性(丹羽 1992, 2006)についても分断せずに扱うことができる。

- (35) a 中元はビールぐらいがいいんじゃない。(例示)
 b 学校へぐらい行きなさい。(最低限)
 c 3時ぐらいにおやつを食べよう(程度)(29a再掲)

このような副助詞の持つ多様な意味用法の連続性から、丹羽(2006)は、「とりたて」を、副助詞類に共通の意味機能「範列・同類関係の提示」として捉え直した。丹羽(2006)はさらに、この副助詞把握に従って、範列同類関係の提示と提題用法を併せ持つ、あるいは両者にまたがる形式を係助詞と位置づける。副助詞の継承追究は、係助詞の継承追究とも不可分である¹²⁾。

ここで見た城田(1987)の副助詞の形態論的整理は、形態統語的振る舞いという現象面と、意味機能、形式の分類を、それぞれ独立にとらえた上で、その対応関係を見ることを可能にする。係助詞・副助詞、さらには接尾語、格助詞といった、隣接既存の品詞の分類枠とも矛盾せず、語彙項目の形態的同一性の保持をも両立して損なわない。「最も合理的」(丹羽 2006)との評価もうなずける。立場によって扱いの異なる形式(例えばホドやマデ・ヨリ等)や、従来、副助詞とは考えられてこなかった形式(以外、カギリ、アタリ、ドコロカ等)、のほか、時空を表す多数の体言語彙(ドコロ、以前、現在など)、抽象的意義をあらわす語(手段・目的・理由)等について、名詞も含め、副助詞という範疇のなかで、あるいは副助詞との並行性・関係性において精確に位置づけられる可能性を具体化する枠組みといえるだろう。

2.3 「副助詞」の継承と範疇としての史的展開

ここまでの整理を表3(次頁)にまとめる。語分類においては、形式の同一性や機能の連続性を考慮した整理と、意味機能と統語的位置づけの対応を重視した整理がありうる。「副助詞」というカテゴリーは、前者の立場で継承され、後者の立場では、提題助詞・とりたて詞、形式副詞、形式名詞などの区分に置き換えられてきたといえる¹³⁾。

3. まとめと次稿にむけて

山田(1908)にはじまる副助詞という範疇は、格助詞や係助詞および副助詞相互の承接関

表3 現代語副助詞の振る舞い

形式例		ぐるみ・ ずつ・ごと	など	← →		など・は・なら
		ぐらい・まで	ぐらい・まで			ぐらい・まで
統語的特徴		ほど・あたり・より		ばかり・だけ	しか・さえ・も	って
格助詞との承接		前置	前置	前置/後置	後置	後置
ノ連体用法の可否		○	○	○	×	×
述語用法の可否		○	○	○	×	×
連体形へ後接(形式体言構成)		×	○	○	×	×
述語接続形・連用形への接続		×	×	○	○	○
連体文内性		○	○	○	○	×
意味機能		数量・範囲・程度		限定/例示	極限/対比	提題
分類 各説	丹羽 (2006)	意味機能 語分類	範列同類関係の提示			
			副助詞			係助詞
	近藤(1985)		準体型	混合型	連用型	—
	宮地(2007)		i類	ii類	iii類	iv類
	城田(1987)		副助詞			
(参考) 中古語の分類との対応		第1種副助詞	—	第2種副助詞	係助詞/ 提題助詞	

係を基盤とした構文的振る舞いに基づいた区分であった。副助詞としてであれ、とりたて詞としてであれ、その区分の追究・精緻化は、相互に矛盾しない把握へ帰着しているように見える。「副助詞」という区分は、語分類を超えて、日本語の構造的な基盤の一側面を呈する範疇的把握の一つといえるだろう。語分類における立場の相違は、根本的には大きな障壁ではない。個々の形式の現象面における様相の記述とその精緻化は、いずれの立場でも目指され、蓄積を共有しうるからである。また逆に、個々の形式の観察だけが、その語分類の設定根拠や、それぞれの立場の立脚点を検証・支持する材料となりうる。語の分類と、意味用法、統語的振る舞いを峻別して各々の立場に還元していく営みは、立場の相違を超えた相互示唆をもたらすだろう。

一方、この対立は古代日本語と現代日本語という観察対象の異なりの反映でもある。歴史的観点から表3を見ると、古代語と現代語では形式の所属の様相に変化があることもわかる。特に現代語においては、多機能にかかわる形式の多さ、新たな形式の参与が顕著に認められる。

現代語副助詞の形態統語的振る舞いの多様性と意味用法の多様性は、個々の副助詞が特定の層で機能する古代語とは異なる在り方である。統語的振る舞いに応じた意味機能の分類と語分類に矛盾がなかった古代語に対して、現代語では、意味機能に応じた統語位置と形式の対応関係が一對多の関係といえる。「意味機能を形式が担うシステムから構造が支えるシステムへ」

の変化ともいえるだろうか（宮地 2007）¹⁴⁾。

副助詞の多様性は時空間の現象面において興味深い動態を呈している。副助詞研究において、このような日本語の史的变化の内実を問い、合理的な説明を与えることは日本語史研究の課題である。この方面についても、様々な立場での追究が蓄積されている。紙幅が尽きたので、その進展や成果を踏まえての展望については機会を改めて述べることにするが、どのような語分類の立場を取るにせよ、またどの時代の日本語に関心を置くにせよ、副助詞類の様相は、日本語の連用成分に参与する形式の多様性と多機能性を示す点で、注目すべき研究課題の一つといえる。副助詞類の動態と多様性に対して整合的な説明を追究することは、副助詞とは何かという課題に対し合理的な答えを導くのみならず、連用句、副詞句に関する追究の一翼を担う営みと考える。

付記：本稿の一部は、科学研究費補助金15K02563による研究成果を含む。

注

- 1) 本稿は、講座の一章として執筆した原稿「副助詞研究の展開と展望—史的観点から」（2014年脱稿）の前半部に加筆修正を行ったものである。未刊のため、出版社の承諾を得て原稿を一旦取り下げている。標題を改めて現在の見解として発表しご批評を乞う。講座本冊の刊行に際しては、必要な情報を補訂して、再度、改稿する。
- 2) 山田（1908, 1936）は文語の観察に立脚している。山田（1922）は「口語法」として「文部省編の尋常小学読本同国語読本」等の教科書類、「国語調査会の口語法その他口語法を説きたる諸書」から挙例する。
- 3) 近世近代に見られる否定極性の「ほか」。上方語で確立し「水をほか飲まぬ」「これだけほかかない」のように「しか」と同じ構文条件で用いられる。上方語に基盤をおく近世・近代スタンダードとして近代標準口語に流入し、多くの近代口語文法・辞書類に記述がある。宮地（2007）参照。
- 4) 例えば「すら」は中古には漢文訓読専用語となり、「のみ」は上代で第1種、中古で第2種の振る舞いを見せる（小柳 1998）。中古の「のみなり」はすべて和歌中の古い語法（小柳 1997a）、「のみの」例は近代文語の例で中古の様相とは言いがたい。土佐日記の「さへだに」例（山田 1908: 596）は2層性の反例に見えるが、和歌中の孤例である。
- 5) 山田（1908）では係助詞・副助詞の差違の要点の一つとして、副詞との承接関係にも言及がある（1908: 598, 633）。山田の副詞分類には修正の余地も大きい（矢澤 2003、川瀬 2013参照）、副詞と副助詞・係助詞類の関係性の精査は範疇性の追究に寄与しうる。
- 6) ただし「形式副詞」の内実は立場により大きく異なる。松木（2006）参照。
- 7) 「焦点」のほか「集合」「作用域」「フォーカス」「量化」など、副助詞類の意味・統語機能を説明する術語は立場や学問的背景によって規定が異なり注意が必要である。
- 8) 此島（1966）では山田・橋本文法を基盤とし、通時的な記述に適う助詞分類として、係助詞・副助詞の対立を維持する。橋本の準体助詞・準副体助詞を退ける一方で近代語に特徴的な類として並立助詞を採った。その先見性については宮地（2018）で述べた。
- 9) 「とりたて」概念の創出と研究史については澤田（2007）に詳しい。
- 10) 例えば、現代語マデに関する安部（2002）、藪崎（2010）、ダケに関する安部（1999）、上山（2008）、佐野（2000）、バカリに関する茂木（2002）、安部（2000）など。
- 11) とりたて助詞と副助詞の継承の整理として多田（2012）も参照されたい。

- 12) 内容や所属形式については差違があるものの、係助詞・副助詞の区分の必要性を述べるものとして、前節で触れた宮地(2007)のほか、半藤(2003)、木田(1998)などがある。
- 13) 松下(1930)の整理もこれに該当する。題目「は・も」を提示助辞、第2種副助詞相当を特提助辞、第1種副助詞相当を副助辞とする。助詞類は名詞の格変化(態)を示す「原辞」と位置づけられ、独自の立場を示す。
- 14) 衣畑(2011: 170-171)はこの提案に対し「興味深い指摘」としながらも、ここでいう「システム」とは何か、「構造の問題なのか、範疇の問題なのか、それともそれ以外の問題なのか」が見えにくいと批判して正鵠を射る。「この変化は一方方向的で、一回きりしか起こらない変化なのだろうか」「変化の起こる条件が指定されていないだけに、理論的な位置づけが難しい提案であるとも言えることができる」とする。宮地(2007)の筆者としては、現在のところ、十分な回答の用意はない。漠然と、格助詞・係助詞を含め、“助詞”類の個々の形式に起こった変化の集積がもたらした帰結であって、範疇の対立の問題であろうと思っている。考え続けていきたい。

用例出典

原則として新日本古典文学全集(小学館)、日本古典文学大系(岩波書店)による。

引用文献

- 安部朋世(1999)「ダケの位置と限定のあり方：名詞句ダケ文とダケダ文」『日本語科学』6。
- 安部朋世(2000)「バカリによる「限定」」『表現学部紀要』1。
- 安部朋世(2002)「とりたて」のマデの意味分析」『鶴見大学紀要』第一部国語・国文学編39。
- 安部朋世(2006)「副詞セイゼイの意味・用法と「とりたて」の在り方」『現代日本語文法：現象と理論のインタラクション』ひつじ書房。
- 青木伶子(1992)『現代語助詞「は」の構文論的研究』笠間書院。
- 青柳宏(2006)『日本語の助詞と機能範疇』ひつじ書房。
- 青柳宏(2008)「とりたて詞の形態的、統語的、意味的ふるまいについて」『日本語文法』8(2)。
- 内田賢徳(1975)「形式副詞—副助詞の形相」『国語国文』44(12)。
- 奥津敬一郎(1986)「形式副詞」『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社。
- 尾上圭介(1990)「文法論：陳述論の誕生と終焉」『国語と国文学』67(5)。
- 大槻文彦(1897)『広日本文典』『広日本文典別記』(復刊1980勉誠社)。
- 岡澤鉦次郎(1900)『初等日本文典』(前篇上・下)吉川半七(国立国会図書館「近代デジタルライブラリー」による)。
- 川端善明(1983)「副詞の条件：叙法の副詞組織から」『副用語の研究』明治書院。
- 川瀬卓(2013)「副詞の歴史的研究における課題と可能性」『弘前大学国語国文学』34。
- 木田敦子(1998)「係助詞と副助詞」『東京女子大学日本文学』89。
- 衣畑智秀(2011)「係助詞・副助詞」『シリーズ日本語史3文法史』岩波書店。
- 此島正年(1966)『国語助詞の研究：助詞史素描』桜楓社。
- 小柳智一(1997a)「中古のバカリについて：限定・程度・概数量」『国語と国文学』74(7)。
- 小柳智一(1997b)「中古の「バカリ」と「ノミ」」『国学院雑誌』98(12)。
- 小柳智一(1998)「中古の「ノミ」について：存在単質性の副助詞」『国学院雑誌』99(7)。
- 小柳智一(1999)「中古のマデ：第一種副助詞」『国語学』199。
- 小柳智一(2000)「中古のバカリとマデ：副助詞の小さな体系」『国学院雑誌』101(12)。
- 小柳智一(2008)「副助詞研究の可能性」『日本語文法』8(2)。
- 小柳智一(2010)『『あゆひ抄』の副助詞研究』『国語と国文学』87(1)。

- 小柳智一（2013）「たましるをいれべきてには：副助詞論の系譜」『日本語の研究』9（2）。
- 近藤泰弘（1983）「副助詞の体系：現代日本語」『日本女子大紀要』23。
- 近藤泰弘（1995）「中古語の副助詞の階層性について：現代語と比較して」『日本語の主題と取り立て』くろしお出版。
- 近藤泰弘（2003）「名詞の格と副：格助詞と副助詞の性質」『朝倉日本語講座5 文法Ⅰ』朝倉出版。
- 近藤泰弘（2007）「平安時代語の接続助詞「て」の機能」『國學院雑誌』108（11）。
- 工藤浩（2000）「副詞と文の陳述的なタイプ」『日本語の文法3 モダリティ』ひつじ書房。
- 澤田美恵子（2007）『現代日本語における「とりたて助詞」の研究』くろしお出版。
- 城田俊（1987）「副助詞について」『国語国文』56（3）。
- 田窪行則（2010）『日本語の構造 推論と談話管理』くろしお出版。
- 多田知子（2012）「副助詞の概念ととりたて助詞の概念」『青山語文』42。
- 寺村秀夫（1991）「第7章取り立て：係りと結びのムード」『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版。
- 時枝誠記（1954）『日本文法 口語篇』岩波書店。
- 西山佑司（2003）『日本語名詞句の意味論と語用論』ひつじ書房。
- 仁田義雄（1997）『日本語文法研究序説』くろしお出版。
- 丹羽哲也（1992）「副助詞における程度と取り立て」『人文研究』44（13）。
- 丹羽哲也（2006）「「取り立て」の概念と「取り立て助詞」の設定について」『文学史研究』46。
- 丹羽哲也（2007）「範列関係を表す複合副助詞」『人文研究』58。
- 野田尚史（1995）「文の階層構造からみた主題ととりたて」『日本語の主題と取り立て』くろしお出版。
- 野田春美（2017）「副詞＋「の」による名詞修飾の諸相：書き言葉コーパス調査に基づいて」『語彙論的統語論の新展開』くろしお出版。
- 沼田善子（1986）「とりたて詞」『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社。
- 沼田善子（2000）「第3章 とりたて」『時・否定ととりたて』岩波書店。
- 沼田善子（2003）「現代語のとりたての体系」『日本語のとりたて：現代語と歴史的变化・地理的変異』くろしお出版。
- 沼田善子（2008）「とりたて詞の分布と意味をめぐって」『日本語文法』8（2）。
- 沼田善子（2009）『現代日本語とりたて詞の研究』ひつじ書房。
- 半藤英明（2003）『係助詞と係結びの本質』新典社。
- 橋本進吉（1933-34）「国語法要説」『国語法』（国語科学講座6）明治書院。
- 益岡隆志（2013）「名詞修飾節と意味階層構造」『世界に向けた日本語研究』開拓社。
- 益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語文法：改訂版』くろしお出版。
- 松木正恵（2006）「複合辞研究史Ⅴ「形式副詞」との関連性：山田孝雄から奥津敬一郎まで」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第3分冊（51）。
- 松尾捨治郎（1936）『国語法論攷』文学社（1961増補版、白帝社）。
- 松下大三郎（1930）『改撰標準日本文法』中文館（徳田政信編1973勉誠社）。
- 南不二男（1974）『現代日本語の構造』大修館書店。
- 南不二男（1992）『現代日本語文法の輪郭』大修館書店。
- 宮田幸一（1948）『日本語文法の輪郭』三省堂出版（再版2009くろしお出版）。
- 宮地朝子（2007）『日本語助詞シカに関わる構文構造史的研究』ひつじ書房。
- 宮地朝子（2018）「【文法史の名著】此島正年著 国語助詞の研究：助詞史素描」『日本語文法史研究4』ひつじ書房。
- 宮地裕（1952）「副助詞小攷：主として準体助詞との関連において」『国語国文』21（8）。
- 茂木俊伸（2001）「とりたて詞の区分をめぐって」『言語学論叢』20。
- 茂木俊伸（2002）「「ばかり」文の解釈をめぐって」『日本語文法』2（1）。
- 茂木俊伸（2008）「とりたて詞の分類をめぐって」KLS 28。
- 森重敏（1959）『日本文法通論』風間書房（1970版による）。
- 藪崎淳子（2009）「「格助詞マデ」の副助詞性について」『日本語文法』9（2）。

- 山田孝雄 (1908) 『日本文法論』 宝文館.
山田孝雄 (1922) 『日本口語法講義』 宝文館.
山田孝雄 (1936) 『日本文法学概論』 宝文館.
矢澤真人 (2003) 「副詞の機能」 『朝倉日本語講座 5 文法 I』 朝倉書店.

キーワード：焦点助詞、副詞句、機能語分類

Abstract

Progress in Study on Japanese Adverbial Particles

MIYACHI, Asako

This paper gives an overview of past studies on Japanese adverbial particles, known as *fuku-joshi*, and shows the prospects for future tasks. An “adverb” is an adverbial particle which functions as the main structure of a continuous/predicative modifier phrase. However, it also shows various usage which overlaps with case particles, focus/topic particles, *kakari-joshi*, and even suffixes. Furthermore, each individual word classified as an adverbial particle has changed historically. This is why diverse positions have been forested in the research of “adverbial particles,” as well as various provisions being made with different objects and scopes of observation. In the background, the difference between researchers’ interests in modern and classical languages is also greatly involved. Moreover, the difference in the fundamental view on category setting is also an influence; for example, it influences where to place the main evidence (functional meaning or syntactic behavior), and how to see the relationship between the form and its affiliation category (whether different categories are set for each function, or whether multiple functions within the category are accepted). On the other hand, many of the adverbial particles are multifunctional over time. It can be said that pursuing a consistent explanation for its dynamics and diversity leads to a reasonable answer to the problem of understanding adverbial particles.

Keywords: focal particles, adverbial, function words classification